

「名大会話コーパス」に現れた文末形式  
—普通体と丁寧体に違いはあるのか—

The sentence-final forms used in Meidai Dialogue Corpus:  
Does the plain style differs from the polite style?

黒沢 晶子<sup>1</sup>

KUROSAWA Akiko

Abstract

This paper discusses whether there are quantitative and qualitative differences between the plain style and the polite style regarding two types of sentence-final forms with the Japanese copula: the 'bare' *da* and *desu* forms and those followed by particles. The result of a survey on *da* and *desu* in Meidai Dialogue Corpus shows that a 'bare' ending is used significantly more often in plain-style conversation than the one in the polite style. One of the reasons for this is that a 'bare' *da* can be used in a monologue, which *desu* has no access to. It is also observed that even in a dialogue an utterance with a 'bare' ending in the plain style often has characteristics of a monologue in that it is not directed to the hearer. A 'bare' *da* ending is a marked sentence-final form in that it is not freely used when an utterance is directed to the hearer whilst a 'bare' *desu* ending is more commonly used in the same environment, and that particles following *da* make communication possible.

キーワード：文末形式、裸の文末、終助詞、対人的モダリティー、文体

## 1. はじめに：問題のありか

丁寧体と普通体の二つの文体は、目に見える形態の違いが明確であるため、日本語教育では、動詞の活用などと同じように、形から入り、形を覚えればよいものとして扱われることが多い。文章語としては、それでかなりの部分がカバーされる。しかし、談話の中で実際に運用する際には、次の例のように、ただ単に形式を置き換えればそれですむというわけではない。

(作例1) A：学生さんですか。

B：はい、そうです。

(作例2) C：?? 君、学生か。／君、学生？

D：??うん、そうだ。／うん、そうだよ。／うん、そうだけど。

Eメールの冒頭で名乗るとき、丁寧体なら（作例3）のように書くのが普通でも、普通

<sup>1</sup> 山形大学国際センター（2009年10月1日より基盤教育院）教授

体の場合、(作例4)は通常の名乗りとしては問題である。

(作例3) 花笠サークルの金です。

(作例4) ??花笠サークルの金だ。

電話なら「もしもし、俺」、「金だけど」などと言うところだが、親しい相手へのメールではどう書くのが適当か、迷うところである。さらに動詞述語にも同様の不均衡が見られる。

(作例5) あした5時に部室へ行きます。

(作例6) ??あした5時に部室へ行く。／あした5時に部室へ行くよ。／あした5時に部室へ行くからね。

このような例はいくつでも挙げることができ、あたかも普通体の談話やeメールでは、文末に終助詞や終助詞的用法の接続助詞などがなくと不自然であるかのように見える。では、実際には、普通体、丁寧体それぞれの文末形式には、終助詞等の使用頻度の点で差があるのだろうか。また、もし、何か使い方に違いがあるとすれば、それは何に由来するものなのだろうか。本研究では、会話コーパスを用い、「だ」と「です」にしぼって、文末に助詞が付く形式と付かない形式の文体ごとの頻度を調査する。また、抽出された用例に基づき、文体によって、それぞれの文末形式の用法と機能にどのような共通点・相違点があるかを考察する。

## 2. 自然談話の文末形式と機能—先行研究より

文末に終助詞等などが後続しない形を上原・福島(2004)にならって「裸の文末形式」と呼ぶ。大曾(1986)は、誤用分析で「今日はいい天気ですね」と話しかけられた学習者が「はい、そうです」と裸の文末形式で答えた例を挙げている。「いい天気だ」という命題を肯定するだけでは不十分なのは、このやりとりが内容を云々するよりも、共感を示すことにコミュニケーションの主眼がある挨拶だったからだが、この例は、話し手の聞き手に対する伝達態度を表す対人的モダリティーを担った終助詞の機能と、それが必須になるケースを示している。

一方、裸の文末形式に焦点を当てた先行研究には、メイナード(1993)と上原・福島(2004)がある。メイナードは大学生の友人同士の普通体の会話中に用いられた裸の文末形式について、「相手を意識して、相手に受け入れられ易いように形成したものではなく、「思考や経験をそのまま表現した」ものだとしている。上原・福島(2004)は、これが丁寧体にも共通することなのかを自然談話をデータとして考察し、二つの文体に共通する裸の文末形式の機能を「話者が意図や情報の表明・伝達だけをする」と述べている。これは、聞き手の存在を意識しない独話や独話的用法にも、聞き手の存在を意識した用法(返答、返答以外、その中間の共同発話的なもの)にも共有される働きであるという。

これらの先行研究は、当然のことながら、普通体の談話でも確かに裸の文末形式が用いられており、かつ、丁寧体とも基本的な機能において違いのないことを示している。本稿では、コーパスの調査結果を主に上原・福島(2004)の用法の分類と機能の記述を参照しながら分析していく。

### 3. 「だ」と「です」－文末形式の頻度調査

#### 3.1. 調査方法

「名大会話コーパス」(『茶漉』一般公開版)に収録された約100時間の雑談の文字化データを資料として、「だ」及び「です」(活用形を含まず、その形のみ)とそれに終助詞、接続助詞が後続して終わる文末部分を抽出し、分析対象とした。会話参加者は10代から90代まで、出身地域もさまざまな女性161名、男性37名である。『茶漉』は用例・コロケーション抽出システムとして開発されたもので、キーワードの前後に特定の語形や品詞を含めるか除外するかを指定して、求める条件に合った例を取り出したり、共起情報を得ることができる。

なお、裸の文末とは「そうです。」「そうだ。」のような例を指すが、検索の対象としては、句点(。)だけでなく、(あっ、そうだ)の括弧や「そうなんだー」の長音符号も含めた。但し、読点(、)は含めず、文末以外とした<sup>2</sup>。引用を表す格助詞「と」「って」等は除外した。また、問かけ(質問)を数えないように、裸の文末からは、「？」が付くものを、助詞付き文末からは終助詞の「か」を予め取り除いた<sup>3</sup>。

また、本コーパスの助詞には、「ね」「ねー」「ねえ」のように長母音の表記が複数あり、「けど」「けれど」「けれども」や「もの」「もん」のような音変化した形が存在するため、それぞれ別個に抽出した。さらに、「そうですけどね。」「そうだよね。」のように接続助詞の終助詞的用法のものや終助詞が複合的に重なるものが含まれるが、次節の結果では、全体像がわかりやすいように、「ねー」「ねえ」は「ね」の項に含め、複数の助詞が重なるものは、「だ」「です」に直接続くものの項にまとめた<sup>4</sup>。

#### 3.2. 結果と考察

##### 3.2.1. 文末形式の頻度と裸の文末形式の用法・機能

表1に「です」と「だ」の文末形式に裸の文末と助詞付き文末がそれぞれどのくらい用いられていたかを示す。名大会話コーパスは大半が親しい者同士の雑談であることから、「です」よりも「だ」の頻度が高くなっている。が、どちらも裸の文末形式より助詞付き文末形式のほうがはるかに多く、「だ」で3倍強、「です」で4倍近い。日本語の発話において裸の文末形式があまり用いられないと言われている(メイナード1993:119など)ことが裏付けられたと言える。

表1 名大会話コーパス「です」と「だ」の文末形式

文 体	裸の文末		助詞付き文末		合 計	
	頻度	比率 (%)	頻度	比率 (%)	頻度	比率 (%)
です	725	21.0	2729	79.0	3454	100.0
だ	2185	24.0	6933	76.0	9118	100.0
合計	2910	23.1	9662	76.9	12572	100.0

$p < 0.01, \chi^2 = 12.45.$

<sup>2</sup> 「一緒だ、僕らと。」(倒置)は、一種の文末と見ることもできるが、ほかに「てめえこそ何様だ、とかって。」(引用)や「ああ、そうだ、そうだ」(繰り返し)なども含まれるため、一括して「文末以外」の扱いとし、本調査の範囲外とした。

<sup>3</sup> 裸の文末に「？」が付くものとは、「あ、汚いとやだ？」のような例を指す。

<sup>4</sup> 接続助詞が文末に使われると、終助詞同様、聞き手に対する話し手の命題伝達のモダリティを表す。例えば、「〜けど。」には、言い切りを避け、ためらいを表現することで言表態度をぼかし、和らげる働きがある。

「だ」は「です」に比べ、「裸の文末形式」が有意に多い。冒頭で挙げた問題意識（丁寧体なら裸の文末形式でよくても、普通体の場合は終助詞等を付加しなければ不自然になる例が少なくなく、不均衡がある）からすれば、「だ」のほうに助詞付き文末が多いことが予想できたわけだが、実際には反対の結果が出た。

「だ」に裸の文末が多いひとつの理由としては、聞き手の存在を意識しない独話や独話的な用法が普通体のみにある（上原・福島2004：121）ことが考えられる。また、「あっ、そうだ」「あ、ほんとだ」のように間投詞的に使われるものも多い。間投詞的な使い方は、聞き手がいても特に聞き手に向けてのものではなく、独話の延長線上にあると言ってよいだろう。一方、文末の「そうです」は（含みのない）返答に使われ、通常の、聞き手に向かうものである点が「そうだ」と異なる。

「だ」に裸の文末が多いもうひとつの理由は、特定の表現が繰り返し使われることである。このうち「そうなんだ」は614件にのぼる<sup>5</sup>。「そうなんだ」は、聞いたことがらへの納得を表す点では話し手自身に向かう発話だが、同時に合鍵のように聞き手に相手の話を聞き、理解したことを伝える機能も併せ持っており、その点では対者的なものと言える。丁寧体にも「そうなんです」があるが、裸の文末は24例のみで、「先生も関西の方ですか。（そうです。） あっ、私もそうなんです。」のように使われ、合鍵の要素はない。形が同じでも、機能は異なると言える。

それ以外の、聞き手を意識した発話でも、裸の「だ」文末が使われないわけではない。ただ、そのうち、聞き手の問いかけへの返答として「～だ」が使われることは、あまりないようだ。次の例は、その珍しいケースである<sup>6</sup>。

(1) F004：セカンド ハンド って<sup>7</sup>。

F028：えっ、あの一、（あー）1回（うん）使われてるやつ。

F004：中古？

F028：中古。中古だ。日本語が出てこないから。もう。

しかし、ここで「中古だ」と言っているのは、「中古？」という問いかけへの直接の返答であるよりは、出てこなかった日本語を自分自身に言い聞かせる独話的な意味合いが強い。

裸の「だ」の聞き手のある状況での発話は、返答以外のものが一般的である。次の(2)～(4)は、「話し手の知っている情報や事実、感想や感覚、考えや判断、経験等」を伝えたり表明したり（上原・福島2004）している例である。丁寧体の場合は終助詞の持つ含みがないため、相手に押しつける感じがしないことが特徴として挙げられているが、「だ」で言い切ると、(2)、(3)のように、むしろ話し手が聞き手に特に配慮せずに情報や感想などを言い放つ、（非常に）広義での独話性を持つようである。普通体の「だ」独特の用法と言えるかもしれない。

<sup>5</sup> コーパス上では、「そうなんだ」「そうなんだ」「そうなんだ」のように形態素解析が一定していない。最初のが正しく、あとの二つは誤解析である。本調査では後者も含めて数えてある。

<sup>6</sup> 名大会話コーパスから抽出した例は、形態素ごとの分かち書きとなっている。「保証しよう」のように誤解析も含まれるが、そのままにしてある。

<sup>7</sup> Fは女性、Mは男性を指す。話者の属性は、「名大会話コーパス利用上の注意」の参加者情報で見ることができる。

- (2) F069: そろばんは楽しかった。  
F149: いつから始めた？  
F069: いつだったかな、小学校4年？  
F149: あ、同じぐらいだ。
- (3) M026: ほうだ。あんときはウグイス、ウグイスが鳴いて、取れたてのアサリを食って、〈笑い〉どこへ来たんだってね。  
F128: いいですね。いいなあ。魚とたわむれて、そして、ねーもうすごいいいな、ぜいたくだ。

次の例では、「君のせいでコンピュータが文字化けした」という命題内容に加え、裸の文末形式が命題を断言、言明する働きを持っていることが冗談としての効果を強めている。

- (4) F008: まあええわ。  
F115: いや、思いっきり、コンピュータまで狂つとる。文字化けしとる。  
F008: ぼくのせいじゃないだろ、これ。  
F115: 絶対君のせいだ。保証しよう。  
F008: んなこと保証されてもさー。

F008とF115は、ともに愛知県出身の20代前半の女性であるが、男言葉を用いて話している。普通体がスピーチレベル・シフトとしてではなく通常使われる親しい人間関係だから、こうした言い方が冗談と受け取れ、許されるとも言えよう。

裸の文末は、独話的な発話だけでなく聞き手に向かう発話でも、このように「だ」と「です」の間に相違点もある。しかし、上原・福島(2004)がその中間的なもの—共同発話的なもの—として挙げた用法は、もともと数は少ないが、「だ」にも見られる。(5)では、F023、F107、F128の3人がほかの1人が途中まで言ったことを順に引き継いで発話を完成させている。

- (5) F107: ライスがこうやって真ん中にルーが入ってるの。  
F023: ここにずうっとあって、で、ここにカレーがダーっと入ってて。  
F107: ルーが入って。見た目はうまそうなんだけど。  
F128: おいしくないんだ。

### 3.2.2. 助詞付き文末形式

次に「です」「だ」に終助詞、接続助詞が後続する文末形式を見てみたい。

「です」「だ」に後続する各終助詞、接続助詞の頻度(文末の環境で)は、表2、表3に示す通りである。「です」「だ」ともに、「よ」、「ね」、「けど」と高頻度で共起し、次いで「から」となっている。「わ」は、「ですわ」「だわ」ともに男女の用例が現れた。「だ」には、ほかに、「です」に後続する例のなかった助詞として、回想や確認の「っけ」、「もの」「ぜ」など、バラエティに富んだ助詞が見られた。

なお、これらの表は、ただ単に各助詞が「です」「だ」に続いて出現する頻度を示して

いるだけだが、それがただちに「です」「だ」との共起度の高さにつながるわけではない。例えば、「よ」は、もともと非常に出現頻度の高い助詞で、他の形態素とも高い頻度で接続関係を持っているとすれば、見た目の高頻度に関わらず、「ですよ」や「だよ」という結びつきが特別強いものだというわけではない可能性もある。『茶漉』にあるコロケーション抽出システムを使って、「だ」「です」とそれぞれに後続する終助詞、接続助詞との結びつきの強さを見てみた（文末+文末以外の全体で）ところ、「ですよ」という結びつきは、tスコア42.7で、ほかのどの助詞よりも強いことが確認できた。それに対して、「だよ」という結びつきは、tスコア60.3で、「だから」（63.0）に次いで2番目の強さだった<sup>8</sup>。

表2 「です」後続助詞（文末）

後続語	頻度
よ	1571
ね	662
けど	400
から	66
が	15
な	6
わ	5
し	3
ので	1

表3 「だ」後続助詞（文末）

後続語	頻度
よ	3012
けど	1286
ね	1216
から	646
っけ	349
な	145
わ	136
し	108
もの	24
ぜ	7
が	3
べ	1

「だ」「です」と共起頻度が最も高い「よ」の例を次に1例ずつ挙げておく。(7)は、複数の助詞が後続している例である。文末の「だよ。」は1033件、「だよね」は、音変化形も含め、1844件の使用例があった。「だよな」のバリエーションと合わせると1877件で、「よ」が後続する全例の6割以上を占める。「ですよ」と「ですよね」は、それぞれ789件と782件、ほぼ半々で、「よ」+「ね」の結びつきが強く、一語化しつつあることが窺われる。

(6) F023:ほん で -、もう 1つ その 前 に、その、ほら、フィッシュ・アンド・チップス が 山 の よう に あっ た じゃん。で、あれを私 は ホテル で 半 分 し か 食 べ ら れ な か っ た じ ゃ な い。

M023:半 分 食 べ た だ け で も す ぎ い で す よ。

(7) F094:ウナギ は ウナギ。(うん)え、ウナギ っ て 魚 だ っ け ?

M010:魚。

F094:魚 だ よ ね。

<sup>8</sup> 但し、これには文末以外の位置における出現頻度も含まれ、誤解析分を取り除いてもいないので、そのまま文末位置での共起度と同じと考えることはできない。あくまでも参考としての数値である。

(6)の「すごいですよ」は「すごいです」でもよく、話し手に助詞を付けるかどうか選択の余地があるケースだが、M23は「よ」を加えることで、年上だが恐らく親しい相手に親しみと優しさ、大量の揚げ物にたじろいでおかしさを共有している気持ちを伝える効果をあげている。一方、(7)は「よね」がなければ、F094は、ウナギが魚だという多少曖昧だった知識を確認することができないという点で助詞が必須となる例である。

### 3.3. 後続助詞の含みの持つ効果と文体との関係

後続助詞の持つ運用上の働きが「です」と「だ」では異なってくることがある。ここにひとつの挿話がある。アルバイトをしていた留学生が店長に「ちょっと手伝ってくれよ」と言われ、丁寧に言うつもりで「はい、手伝ってあげますよ」と答えたところ、張り倒されたのだという。これは、聞き手に恩恵を与える含みが生じる「てあげる」を、似た言語形式にそのような含みのない母語(韓国語)の転移で目上に対して使ったことが問題になった例であるが、そこに「よ」が加わったことで店長の怒りが倍加したものと推測される。この場合、アルバイトとして当然の仕事なのに、目上の店長にあたかも恩恵を押し付けるような含みが生まれていたわけだが、興味深いのは、これを普通体にして家族や親しい友人に「手伝ってあげるよ」と言ったのなら、「てあげる」によって相手を思いやっている気持ちを、そして、「よ」によって自分の意志でそうするのだということを示せるということである。「よ」に関しては、文体によって、この終助詞の含みの持つ効果が表裏の関係となって異なる方向に作用したと言えよう。

もう一度最初の問題にもどると、「だ」は単に「です」の普通形で、言語記号上の置き換えをすればコミュニケーションが成り立つというわけではない。作例(1)と(3)の裸の「です」が無標であるとするなら、作例(2)と(4)の裸の「だ」は、明らかにそうではない。独話的(あるいは共同発話的)要素のない場合、または「～だ」と言い切る断定的ニュアンスを冗談として使うのでない場合、乱暴・尊大な感じを与えてしまう。つまり、聞き手を意識する対話の場合、「だ」を裸の文末形式として使うことは中立的ではなく、有標だということである。かえって文末に対人的モダリティー要素としての助詞を付加することによって、聞き手への心遣いを表し、対話が成り立つようになるのである。このことは、「です」を始めとする丁寧体に「よ」や「ね」を付けて、それが適当でないケースとちょうど反対の関係になっている。(例：目上からの指示に対し「はい、わかりました」なら問題ないが、「はい、わかりましたよ」では尊大で横着な印象を与えてしまう<sup>9</sup>。)言い換えれば、聞き手への配慮が丁寧体は裸の文末形式で、普通体は文末に助詞を付ける形式で表せる対照的な関係をなしている場合があるということである。

## 4. おわりに

冒頭で取り上げた疑問は、普通体の談話やeメールでは、文末に終助詞や終助詞的用法

<sup>9</sup> この例は、上原・福島(2004:110)に、学習者が文末形式に関して、しばしば過不足ない自然な会話運びができないことを示す作例として取り上げられている。

の接続助詞などが無いと不自然であるかのように見える例がしばしば見られることから、普通体と丁寧体との間に文末形式の数量的・質的な差があるのかというものだった。名大会話コーパスを使った頻度調査では、まず、どちらも裸の文末形式より助詞付き文末形式のほうがはるかに多く、「だ」で3倍強、「です」で4倍近い。日本語の発話において裸の文末形式があまり用いられないと言われていることを裏付ける数字である。次に、普通体の「だ」のほうが丁寧体の「です」よりもむしろ助詞の付加されない裸の文末形式が有意に多いという結果を得た。

「だ」(普通体)は、独話や聞き手を意識しない発話にも使えるため、そのような発話に用いられる「普通体の裸の文末形式」が本質的に聞き手を意識した発話に専ら用いられる「です」(丁寧体)より多くなっても不思議ではない。それは普通体に独自のものであり、丁寧体は通常の会話でそこに割り込む余地はない<sup>10</sup>。

自然談話から抽出された例を観察すると、聞き手のある発話でも、裸の「だ」の文末形式は、実は聞き手に特に配慮せずに情報や感想などを言い放つ、広義の独話性を持つことがわかる。終助詞などの対人的モダリティー要素がない裸の文末形式は、普通体も丁寧体も聞き手に対する含みのない発話という一点を確かに共有する。一方、助詞付き文末の場合、その含みは、「だ」と「です」では聞き手への配慮という点で反対方向の効果を持つことがある。裸の普通体は、そのままでは聞き手に対する発話で使いづらいという点で有標な文体であり、終助詞等によって初めて円滑なコミュニケーションを成り立たせていると言っても過言ではない。普通体と丁寧体で裸の文末を持つ文が運用上、等価でないという認識を日本語教育の現場でも生かしていきたい。

なお、本調査は、「だ」と「です」という限られた言語形式のみを対象とし、かつ、複数の助詞が重なって使われる形式の用法や機能については踏み込んでいない。今後、他の形式にも調査を広げ、さらに助詞付き文末形式のコミュニケーション上の働きを詳細に見ていきたいと考えている。

## 参考文献

- 上原聡・福島悦子 (2004) 「自然談話における『裸の文末形式』の用法と機能」『世界の日本語教育』14号。
- 大曾美恵子 (1986) 「誤用分析1 『今日はいいい天気ですね。』——『はい、そうです。』」『日本語学』5-9。
- キリシ、ヨーナス アレクシ (2010) 「翻訳から見た役割語—日本語・フィンランド語間の翻訳に出現する役割語の対象研究」『山形大学留学生教育と研究』2号。(山形大学日本語・日本文化研修留学生修了論文)
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティーの文法』くろしお出版。
- メイナード, K. 泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版。

<sup>10</sup> 但し、語り、芝居は、自然談話とは別であり、特に目に見える聞き手がいなくても、丁寧体で語ったり、独白をしたりすることがある。キリシ (2010) は、フィンランド語小説の日本語訳で、丁寧体の語りが登場人物の性別や性格を表す役割語として使われた例を分析している。この語りは地の文の代わりであり、特定の聞き手を持たない。

**資料**

「名大会話コーパス」(茶漣一般公開版) <http://tell.fl.purdue.edu/chakoshi/public.html>  
科学研究費基盤研究(B)(2)「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコ  
レクション研究」(平成13年度～15年度、研究代表者：大曾美恵子)の一環として作成された。